＜資料＞

# 教育実習における学習指導案と教育方法
# ～学生が作成した研究授業の指導案の分析をとおして～

白石　　淳*

本稿は、学生が教育実習で作成した学習指導案を分析し、教育方法に関する課題について述べたものである。

平成30年に高等学校学習指導要領が改訂され、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が求められるようになった。このようななかで、学生は、教育実習において、どのような授業を行えばよいのであろうか。本稿では、学生がこれまで教育実習で作成した学習指導案の記載内容を分析することにより、学生の授業の内容、教育方法を明らかにするとともに、学生の教育方法に関する指導上の課題について検討を行った。

学習指導案では、従来は、教師の教育活動を中心として記載する方法が多かったが、昨今、生徒を主体としての授業展開が求められているところから、生徒の学習活動を中心とする記載が増えてきた。授業における教育方法の工夫については、教科用図書の使用、生徒への発問、板書などが行われている。しかし主体的・対話的で深い授業など、これからの教育方法の方向性を踏まえると、今まで以上に多様な方法がとられるべきである。分析した学習指導案においても、グループワークなどの方法を取り入れている授業もみられたが、従来からの穴埋め式のプリントを用いての授業や板書を中心とする授業が多く、現在は、授業方法の改善への過渡期であると考える。

学習指導案の作成方法については、学生は教育実習前から大学の授業などで学んでおり、その作成の形式など基本的なことは修得しているが、授業の教育方法などの具体的な技法については、学修の浅さがあると思われる。したがって、大学の教職課程においては、学生が教材研究をより深化させられるように、学生に対して適切な指導助言を行うことが必要である。

キーワード：教育方法、学習指導案、教育実習

## 1．はじめに

平成29年に幼稚園教育要領、小学校学習指導要領、中学校学習指導要領が、そして平成30年に高等学校学習指導要領がそれぞれ改訂された。この改訂において、新たな方向性として、「知識の理解の質を高め資質・能力を育む主体的・対話的で深い学び」を目指し、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が求められるようになった。

ところで、学習指導案は、高等学校等において授業を展開する際に必要なものである。授業を行う際に学習指導案の作成が完了すれば、その授業の半分以上ができあがったと言う現職の教員もいるほどである。ゆえに学習指導案からは、授業においてどのような内容がどのように展開されるのかを読み取ることができる。このように、授業展開をすすめるうえで、学習指導案は重要な意義を持つものである。

したがって、教職課程を履修する学生にとっては、学習指導案は重要な学修課題である。大学の教職課程の授業においてこの作成方法を学修し、これを用いて模擬授業を行い、最終段階に実施される教育実習では、実習授業や研究授業を行うために学習指導案を各自で作成することになる。その研究授業等の学習指導案に記載する内容などは、各教育実習校、現場の指導教員に任されている状況もあるので、その様式、内容等は学生により異なるものと考えられる。

＊臨床福祉学科　社会福祉学講座

例えば、学生の作成した学習指導案をみると、一斉授業の講義方式の授業展開を行う授業もある一方で、さまざまな点に工夫をほどこしている指導案もみられる。授業展開の導入部分に「映像を用いている授業」、展開部分に「アニメの主題歌の歌詞を用いている授業」「グループワークを行う授業」「ワークシートを用いている授業」など授業を展開するうえで、生徒が理解しやすく、自分で考えられる授業を行おうとしている。授業展開のまとめの部分においても「プリント」「確認テスト」を用いて定着を図っている授業等、さまざまな面に工夫を重ねている授業がある。また、評価についてもルーブリックによる評価を取り入れている授業もみられる。平成30年の学習指導要領の改訂により、主体的・対話的な学習を進めることになると、学習指導案の形式や内容が今後ますます多様化するのではないかと考える。そこで学習指導要領の改訂以前の段階における学習指導案の形式・内容等の現状、授業展開の現状について、教員養成の最終段階である教育実習[1)]の研究授業に焦点をあて、把握したいと考えた。

教育実習における授業実習や研究授業の学習指導案は、学生により異なる。異なるということは、実習校における指導、指導教員の授業展開・方法に関する考え方がそこに反映されていることでもある。その指導のもと学生は、実際にどのような授業を行っているのであろうか。学習指導案の形式、内容の記載から、どのような授業方法がとられているのかを示すことができると考えた。そこで、学生が作成し研究授業で用いた学習指導案を分析することにより、学習指導案の内容・特徴、教育方法を明らかにする。本稿では、平成23～30年度に行われた教育実習の研究授業で実施された学習指導案58について、分析を行い、研究を進めることにした。加えて、令和元年度に実施された教育実習における学習指導案を用いながら、今後の学習指導案・授業展開のあり方について検討を加える[2)]。

## 2．学習指導案と教育方法の改善

平成30年に改訂された高等学校学習指導要領であるが、「高等学校学習指導要領の改訂のポイント」における「今回の改訂の基本的な考え方」の２点目の項目で、「 知識及び技能の習得と思考力、判断力、表現力等の育成のバランスを重視する現行学習指導要領の枠組みや教育内容を維持した上で、知識の理解の質をさらに高め、確かな学力を育成」と記されている。そのうえで、「知識の理解の質を高め資質・能力を育む主体的・対話的で深い学び」として、次の事項が要点としてあげられている。「『何ができるようになるか』を明確化」と「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」である。何ができるようになるかの明確化については、「知・徳・体にわたる『生きる力』を子供たちに育むため『何のために学ぶのか』という学習の意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していけるよう、全ての教科等を、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の３つの柱で再整理」とされている。

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」については、「選挙権年齢が18歳以上に引き下げられ、生徒にとって政治や社会が一層身近なものとなっており、高等学校においては、社会で求められる資質・能力を全ての生徒に育み、生涯にわたって探究を深める未来の創り手として送り出していくことがこれまで以上に求められる。そのため、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が必要。特に、生徒が各教科・科目等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実が必要」と説明されている。具体的には、「情報を的確に理解し効果的に表現する、社会的事象について資料に基づき考察する、日常の事象や社会の事象を数理的に捉える、自然の事物・現象を観察・実験を通じて科学的な概念を使用して探究するなど」である[3)]。主体的・対話的で深い学びについては、次のように示されている。アクティブ・ラーニングの視点としては、

【深い学び】習得･活用･探究の見通しの中で、教科等の特質に応じた見方や考え方を働かせて思考･判断・表現し、学習内容の深い理解につなげる「深い学び」が実現できているか。

【対話的な学び】子供同士の協働、教師や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自らの考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

【主体的な学び】学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら、見通しを持って粘り強く取組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

である。

「アクティブ・ラーニング」の視点は、知識・技能を生きて働くものとして習得することを含め、育成すべき資質･ 能力を身につけるために必要な学習過程を実現するためのもの。こうした三つの視点を明確にすることにより、授業やカリキュラムの改善に向けた取組を活性化するもので[4)]、「アクティブ･ラーニング」は、「主体的･

対話的で深い学び」を実現するための視点として捉えることが、ポイントとなる。アクティブ・ラーニングは、あくまでもその一つの方法論であり、生徒にとって主体的・対話的で深い学びとするためには、他にも多様な方法があるのではないだろうか。そのためには、学校においてどのような授業展開が必要になるのか、教員はどのように授業改善を進めていくのかが、検討すべき課題であると思う。そのために、個々の教員の専門性から導き出される授業展開上の現状認識、実践の工夫、改善に向かう個々の意識が重要となるのではないだろうか。

## 3．学習指導案の分析

（1）授業に関する基本的な事項

学生が教育実習の研究授業において作成した学習指導案に記載する基本的な情報は、授業実施の「日時」「実施者名」「指導教員名」「教科・科目名」「学年・クラス」であるが、この具体的な情報は、分析を行ったすべての指導案に共通して記載されている。本時の授業の内容についての基本的な記載事項は、学習指導案により異なる。通常記載されるのは、「単元名」「教科用図書名」「単元の指導目標」「単元の指導計画」「本時の指導目標」であり、必要に応じて「生徒の状況（実態）」「その他」が記されることが多い。この記載状況について、次に示す。

【単元名（教材名）】単元名は、55の学習指導案で記載されている。単元は、本時を含む教科におけるひとまとまりとなる学習内容であり、教科用図書における学習活動を、主題ごとに関連性をもたせている内容上の単位である。学習内容の連続性など本時の位置づけを示すもので、授業では重要な意味を持つ。多くの指導案が記載しているものの３指導案は、この単元名を記載しておらず、いずれの単元の学習課題であるかは、本時の学習内容から推認することになる。

【教科用図書名】授業で使用している教科用図書名は、57の学習指導案において記載されている。使用する教科用図書により授業の内容が異なるので、１学習指導案を除いて使用教科用図書名は記されている。同時に本時における教科用図書を使用する該当頁数も指導案に記載されており、学習内容を明確化している。

【単元の指導目標】単元の意義は前記したが、ここではその当該単元の目標を記した項目の有無についてである。52の学習指導案が単元の指導目標を記載しており、本時の位置づけを指導目標からも明確に示している。この記載の方法は、箇条書きとしている指導案が24、文章化している指導案が28である。箇条書きしているものは、１～６項目として記載しているが、２項目の目標をあげているのが10指導案と最も多く、３項目あげているのが９指導案である。記載の内容を、教師の視点で目標を記載しているのは14、生徒の視点で記載しているのは９指導案であった（混在している指導案は１）。箇条書きとしておらず文章として記載している指導案では、教師の視点での記載が20、生徒の視点では８である。このように、単元の指導目標の記載の方法はさまざまであるが、文章による記載、教師の視点による記載の方が、多く用いられている。

【単元の指導計画（学習計画）】学習指導案に単元全体の指導の計画を記すことがあるが、その方法としては単元の学習内容を体系的に記載することが多い。これは単元の目標と連動しており、47の学習指導案が記載している。記載の内容は、単元内の学習項目のみを記す場合と、学習項目に加えて単元の全体時間数・単元内の学習項目ごとの時間数を記す指導案がある。また「配当時間数」として単元の指導計画の時間のみ記載している指導案もみられる。「本時の位置」（学習内容）の項目を設けて、単元の時間数と本時との位置関係を示している指導案が多く存在し、本時の授業の位置付け、授業の進み度合いなども把握できるような記載となっている。

【本時の指導目標】本時の指導目標は、授業の目標を記載する項目であり、授業展開を計画するうえで重要な項目である。54の学習指導案で記載されているものの、すべての学習指導案で記載されているわけではない。単元の指導目標の記載はあるが、本時の指導目標を記すことなく、省略する指導案も数は少ないもののみられた。この本時の指導目標の記載方法であるが、箇条書きとしているものが49指導案、文章化しているものが５指導案であり、箇条書きの形式が多い。箇条書きしている指導案は、項目を１～６と設けているが、３項目の目標を掲げているのが最も多く18指導案、次いで４項目掲げているのが14指導案、２項目が８指導案であり、３、４の項目の記載が中心となっている。記載の内容であるが、教師の視点により目標を記載しているものは12指導案、生徒の視点により記載しているものは35指導案であり、単元の目標とは異なり、生徒中心による記載方法の方が多い。これは授業を行うための具体的な目標であるからではないか。生徒の視点で、「何ができるようになるのか」という平成30年改訂の学習指導要領の内容に合致するように、何ができるようになるのかを具体的に示している指導案は28であった（混在しているのが８指導案）。具体的な記載としては、

「○○○について、関心を持つことができる」
「○○○について、考えることができる」
「○○○について、考察することができる」
「まとめることができる」
「表現することができる」

「○○について、理解することができる」
「主体性が持てる」
「○○○について、説明することができる」
「○○○について、答えることができる」
「○○○について、自分の考えを述べることができる」
「○○○について、自分の言葉で表現することができる」
「○○○について、発表することができる」
「○○○について、支援の方法を理解できる」
にまとめることができる。「関心を持つことができる」や「理解することができる」のみならず「説明することができる」「表現することができる」「発表することができる」など、実際に自分自身で具体的な言動ができるようになることが示されている指導案も少なからずみられた。

このように本時の目標は単元の目標とは異なり、箇条書きで複数の目標を設け、生徒の視点で具体的に記載する方が多いのが特徴としてあげられる。

この目標を「関心・意欲・態度」「知識・理解」「思考・判断」等と、学習指導要領に示されている評価の観点と合致するように記している指導案は14である。

【生徒の実態（状況）】学習指導案に、授業を実施するクラスの生徒の実態を必要に応じ記すことがある。生徒の実態を把握したうえで学習指導を計画するためである。４の学習指導案がこれを記している。中学校ではクラス単位で、特別支援学校では生徒個別に生徒の実態を記すことが多いが、高等学校においては多くの学習指導案では記されていない。これは入学者選抜を経ていることもあり、生徒の学力などが一定に保たれているからではないかと思われるが、今日の生徒の学力・生活状況等の多様化を踏まえると、この点に関する記入は、今後必要な事項かとも考える。

【その他の事項】その他に記載されている事項としては、「本時の指導事項」「本時の学習事項」（２学習指導案）として、本時の授業の内容を示すタイトル、「小単元」（２学習指導案）として単元の区分を記載しているケースもある。「評価の観点、単元の授業を通して実現する生徒の姿」「本時の授業を通して実現する生徒の姿」「評価の方法」「教材観」「指導観」「生徒観」「評価の観点と基準」を記載している指導案もみることができる。

【評価の観点】評価の観点を記しているのは、２指導案のみであり、多くの指導案には記されていない。記載は、「評価の観点と基準」と「評価の観点」としてである。前者は、「需要供給曲線の動きの変化をワークシートにまとめることが出来たか」「市場の失敗が起こる原因を理解出来たか」「寡占・独占市場の消費者への影響を考えることが出来たか」と、「～することができる」という観点が記されている。後者は、「関心･意欲･態度」「思考・判断」「知識・理解」「技能・表現」と観点別に、「授業者の説明に耳を傾けることができる」「授業の発問に答えることで憲法の成立過程を具体的に考えられる」「日本国憲法の成立までの経緯を理解できる」「グループワークを通して、意見を表出し、まとめた内容を発表できる」と、具体的な評価項目が示されている。

（２）指導計画

学習指導案の授業の指導計画において、すべてに共通する事項は、指導計画の「段階」と段階ごとの「時間」である。指導案では、その段階は「導入」「展開」「まとめ（整理）」の３区分（部分）にわかれる。時間はその段階（区分）ごとに指導に要する時間となるが、次のような時間配分となっている。

各学習指導案における導入部分は、３～15分間の時間配分になっているが、そのなかで５分間が最も多い（33指導案）。次いで、10分間であった（13指導案）。また、授業の中心となる展開部分の時間配分は、25～45分間となっている。そのなかで40分間が最も多く（25指導案）、次いで35分間（17指導案）である。授業のまとめ部分としての時間配分は０～10分間であるが、５分間が最も多く37指導案、10分間が８指導案であったが、０分としている指導案もみられた。このように「導入」「展開」「まとめ」の段階（区分）とも中心となる時間配分はみられるものの、実際には多様な時間となっている。学習指導案から読み取る授業時間は50分間が中心であるが、45分間の指導案が10、40分間の指導案が３、55分の指導案が１であり、高等学校の授業時間の標準である50分間以外の授業が14あり、１時間の授業時間が柔軟となっていることがわかる。

次に指導計画の様式であるが、授業の学習内容の計画を次のようにわけて記載している。最も多い様式は、「学習内容（事項）、学習活動、指導上の留意点」の３区分として記す指導案である（34指導案がこの形式であるが、指導上の留意点を「留意点・評価の観点」とする場合もある（１指導案））。次いで、「学習活動の内容、指導上の留意点」と、学習内容と学習活動をあわせて記入するという２区分の指導案が６である（表記が異なるが、「学習内容と学習活動、指導上の留意点」も含む）。続いて、「学習事項・内容、教師の活動、生徒の活動、留意点」と、教師の活動と生徒の活動を分離し４区分としている指導案が５である。うち１つが「教師のやること」「生徒のやること」と記載しているが、これは表記上の違いにとどまる。他に「学習内容、生徒の活動・指導上の留意点、評価の観点・方法」（２指導案）、「学習

活動（教師）、学習活動（生徒）、指導上の留意事項、学習内容」（１指導案）と、生徒や生徒の活動から捉え計画を作成しているものもある。同様に生徒の活動を踏まえているものは、「生徒の活動と学習内容、教師の活動と指導上の留意点」「生徒の活動、指導上の留意点、評価の観点・方法」「学習内容、生徒の活動・指導上の留意点、評価の観点・方法」「教師の活動、生徒の活動、指導上の留意事項、評価の実際」「指導内容及び教師の活動、生徒の学習活動、指導上の留意事項」である。他は、「学習活動・内容、教師の指導・支援、留意点」「学習活動、教師の働きかけ、指導上の留意点」「学習項目、教授・学習活動の展開内容、留意点」と、教師の指導について記載している。なお、「学習指導・内容、学習活動（指導者）、学習活動（学習者）、指導上の留意事項、評価・備考」と、５区分にして記載している指導案もみられた。

これらの活動などに区分を設けているが、学習内容（指導内容他）の展開部分の段階をいくつかの内容に区分（時間とともに区分をしている）をしている学習指導案が多い。展開の部分を２区分としているのが25指導案と最も多く、次いで３区分（18指導案）、区分なしの１区分（６指導案）、４区分（５指導案）である。その他に６、７区分としている指導案もみられるが、２区分ないしは３区分としている指導案が主となっている。すなわち、25～45分間の時間を用いる展開の部分を、15～20分程度の時間で区切りながら、授業の具体的な展開の内容を構成している指導案が中心となっている。

（３）指導計画の指導上の工夫

①導入区分

指導計画における導入の区分は、挨拶、出席確認、前時の学習内容の確認と本時の学習内容の確認を行うことが多い。挨拶、出席確認は定型化しているので、ここでは、まず前時の確認における指導上の工夫をみることにする。プリント返却などを除いて、前時の学習内容についての説明は多いが、説明のなかで発問（確認としての発問）が多く行われている。説明以外にも、プリントで確認をする、教科用図書・資料集・ノートを用いて確認する方法もとられているなど、次のような教育方法上の工夫がなされている。

○発問（11指導案）
○前回のプリントで確認（３指導案）
○教科書・資料集・ノートを用いての確認（２指導案）
○前回のワークシートの確認
○ワークシートを解く
○配布プリントの提出
○生徒の記録内容（プリント）の紹介
○演習ノートでの確認
○ノートでの確認
○図示しての説明

導入の区分における本時の授業内容の確認では、プリント配布などの準備を除いて、学習課題や内容の説明などを口頭により行っているが、授業に関連する発問やクイズ形式の問いがなされていたりもする。また、教科用図書を提示しながら、ワークシートを用いながら、図表・写真、紙芝居、現物などを提示しながら行われることもあるなど、次に示すとおり、口頭のみではなく生徒に可視できるように工夫がなされ、本時の学習内容に興味関心を持たせるようにしていることがわかる。本時の授業内容の説明では、生徒に対していかに学習内容に興味関心を持たせるかが重要であるので、授業者として工夫に力を注いでいることがわかる。

○発問（９指導案）
○教科書の提示（９指導案）
○ワークシートを用いての確認
○演習の答え合わせ
○クイズの出題
○臓器移植意思表示カードの提示
○パネルでの説明
○事例をあげる
○全員に対して発問して挙手を求める（いいか悪いか）
○関連するプリントで説明
○関連する円グラフ、地図を提示
○関連する紙芝居の紹介
○関連する写真の提示
○関連する図の提示
○プリントに穴埋め
○図示

②展開区分

授業の展開の区分が、授業の中心となる部分（時間）である。したがって、この展開区分では教科用図書を用いて説明するのみではなく、生徒が確実に理解できるように授業方法の工夫がなされなければならないし、改訂された学習指導要領においては主体的・対話的な深い学びがなされるための授業の工夫が求められる部分でもある。従来の一斉授業では、例えば、教員の説明→板書→補足説明、その間に教科用図書を読むなど、教科用図書が主に用いられ、教員のまとめとしての説明と板書、加えて関連事項の発問などが授業の展開として進められていたが、ここでは指導上の留意点に着目して、授業の新

たな工夫についてみていきたい。指導案では通常用いられる方法、教科用図書、資料集や演習ノートを用いて授業を進める、発問、指名、机間指導、板書などを行うということは、ほとんどの指導案に記載され行われているので、これらを除いて次に記すこととする。

○プリント・穴埋めのプリントも含む（12指導案）
○ワークシート（７指導案）
○グループを作り話し合い、その後に結果を発表する（７指導案）
○関連する写真・絵を貼る（４指導案）
（パウロ、マッカーサーの登場人物の写真、カントリーサインの写真を提示する）
○サンプル（実際の物）を提示（２指導案）
（バリアフリーデザインのシャンプーとリンス、臓器提供意思表示カード、肌色（人種差別のところで）を提示するなど）
○隣と話し合う（意見交換）
○アイマスクと白杖の体験
○介護の体験（介護の大変さを教える）
○イラストでの説明プリント
○家の仕組みの例示(クレヨンしんちゃんとサザエさん)
○パワーポイント
○紙芝居（世界が100人の村だったら）
○アニメのキャラクターを用いる（ちびまる子）
○例題を解く（預金額　預金準備率）
○具体例を挙げる
○演習ノートの活用
○単語ノートの活用（重要な用語）

穴埋め式のプリントも含む、ワークシートなどのプリントを用いる授業が多くみられる。次に生徒との対話、グループワーク（終了後に発表）を実施する授業が多く行われている。また、福祉に関する体験に取り組む授業も２件みられ、改訂された学習指導要領に示されているアクティブ・ラーニングによる授業が少なからず展開されていることがわかる。また授業のなかで、現物等の資料やアニメのキャラクター、紙芝居、イラスト、写真・絵を用いたりするなど生徒が関心を抱きやすく、かつ理解しやすいように授業を工夫している。パワーポイント等の情報機器の利用は１件であり、高等学校における情報機器の利用頻度の少なさが推測される。例題、演習ノートの活動など従来から用いられている教育方法も採られているが、授業内容の展開や状況により、教育方法を適切に工夫していることを伺うことができる。このように学習内容によるが、情報機器の利用、アクティブ・ラーニングによる方法、教科用図書・副教材の使用などさまざまな方法を駆使しながら、授業が進められていることをかいまみることができる。

③展開区分における評価

展開区分において、生徒に対する学習評価の観点を記入する指導案がある。授業の各段階で、どのような評価を行うかを示しているものであり、指導と評価を合致さるように記されている。これは11の指導案で記載されており、その評価観点の他は、次のような事項である。観点が４項目の指導案の他、観点が６項目、７項目、８項目、９項目で評価されている指導案がある。その観点は次のとおりである。

４項目の観点は、
「知識・理解・思考・判断」
６項目の観点は、
「関心・意欲・技能・表現・知識・理解」（２指導案）
「関心・意欲・態度・思考・判断・知識」（２指導案）
「思考・判断・知識・理解・技能・表現」
７項目の観点は、
「関心・意欲・態度・思考・判断・知識・理解」
８項目の観点は、
「関心・意欲・思考・判断・知識・理解・技能（技術）・表現」（２指導案）
９項目の観点は、
「関心・意欲・態度・思考・判断・知識・理解・技術・表現」（２指導案）であった。

なお、他に「観察、発言」と評価の方法を具体的（生徒の具体的な行動等により）に記す指導案もみられた。記載されている指導案すべてで共通する項目は、「知識」であり、「関心・意欲」も多くの指導案で共通するものである。このことから知識・理解のみならず、関心を持ち、意欲的な学習、思考や判断ができる授業の展開を重んじていると捉えることができる。

④まとめ区分

まとめの区分は、本時のまとめと次回の授業の予告を行う部分となる。この区分は短時間であるが、まとめは本時に学習した内容の定着にもかかわる重要な部分であるし、予告は次の学習内容へとつなぐ時間である。この区分に内容の記載がない学習指導案（教師、生徒の活動欄に記載がない）もみられるが、授業者はどのようにまとめを行い、次回の授業の予告をしているのであろうか。

まとめは本時の学習の確認を行うことが中心となっている。その方法としては、授業を振り返りながら、本時の学習内容を口頭で伝えることが多いものの、口頭のみで展開せずに、何らかの工夫をしている指導案もある。

○発問（５指導案）
○板書事項を振り返る（４指導案）
○プリントで問題（３指導案）
○ワークシートで振り返る（２指導案）
○ノートで確認（２指導案）
○プリントから振り返る
○プリントで確認
○スタディノート・演習ノート・ワークブックを解く
○教科用図書を示す
○討論
○メディアを通じてしらべる

まとめにおいて本時の学習を定着・深化させるために、指導者が発問を行いながら進める授業、定着させるために問題を解く授業、ワークシートなどのプリントを用いながら振り返りを行う授業などがある。プリントなどを用いない場合では、板書、ノート、教科用図書などを用いて本時の学習の道筋を視覚的に確認しながら振り返りを行っている。また、まとめにおいても、討論、メデァで調べるなど、対話、調べ学習など活動的にまとめを進める場合もみられる。

次回の授業の予告については、次回の授業に繋げるために、学習内容に関心を持たせたり、道筋を示したりすることになるが、次回の授業の内容を口頭で伝えたり、説明することが多い。ここでは「教科用図書を開かせる」「教科用図書を示す」などと、４指導案で教科用図書を活用する方法をとり、視覚的に、次回の授業の内容について予告を行い、次回の授業に興味や関心を抱けるように、繋げようと試みている。

（４）評価の方法

学習指導案の最後の部分に、本授業の学習の評価方法（評価と手立て）を記載することがある。記載のない指導案もみられるが、学習指導の目標を設けているのならば、その帰結としての評価があるべきではないだろうか。では実際に、どのような方法で授業の学習結果を評価するのであろうか。

学習指導案の最後の部分に、「評価の観点」を記載している指導案は８である。「評価の実際として展開等の各段階において記載し、また観点別で最後にも記載」をしているのは、11指導案であった。

具体的にみると、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「知識・理解」「技能・表現」の観点別に評価内容を記載している。基本的に本時の目標と一致させているが、目標を細分化して、評価の観点を設けている指導案やいくつかの目標をあわせて評価の観点を設けているものもある。また10項目において評価を行う指導案もみられるし、授業全体の評価、「授業に意欲的に参加できたか」という項目を設けている指導案もあるなど、評価は多様な内容となっている。しかし、実際にどのように評価をしていくのかという記載はなく、授業者（評価者）の力量に委ねられているともみることができる。授業者が実習生であるところから考えると、この表記による評価は実際には難しく、具体的かつ詳細な評価方法をも定めることが望ましいのではないだろうか。

（５）本年度の学習指導案

学習指導案のモデルとして、北海道の私立大学で用いられている指導案の様式がある[5)]。その形式・内容についてみてみよう。記載の内容としては、「単元教材名」「使用教科書」「単元の指導目標」「本時の指導目標」が基礎的な情報として記載される。本時の指導計画としては、「導入」「展開」「整理」の区分があり、それぞれの区分ごとに「学習内容」「学習活動」「時間」「指導上の留意点　その他」の項目が設けられている。前述した、本研究にて分析した指導案における共通した内容となっている。

平成30年改訂の学習指導要領が告示された後の本年度における研究授業の学習指導案について、これまで記してきた事項を踏まえながら、その特徴的な点を示すこととする。

単元名、単元の目標、単元の指導計画は、前述した学習指導案と異なる点はみられない。本時の目標については、「意欲・関心・理解」「思考・判断・表現」「知識・理解」の観点により、「理解することができる」「まとめることができる」「考えることができる」「表すことができる」「気づくことができる」など、生徒が実際に「具体的にできること」が目標として記されている。「授業の展開過程においては、「個人ワーク･グループワーク」「グループワーク」と対話的な授業が行われている。とくに学習指導案では、グループワークの結果「新たな発見などを探す」と表記されるなど、発展的・能動的な授業を展開するように計画がなされている。一斉授業においても、単に説明を聞く授業ではなく、「プリントに自分の考えを記入させる」など、生徒自身の考察を深められるような授業が行われている。評価については、一つは「評価基準」を設けて、「(S) 期待以上」「(A) 十分満足」「(B) おおむね満足」「(C) 努力を要する」の段階で評価、いわゆる「ルーブリック評価」を用いている。他は、授業の展開に沿って評価の方法を設けながら、評価を行い、「思考･判断･表現」の観点により「考え」「表現」をするようになっている。このように授業展開・評価ともに改訂された学習指導要領を踏まえて、授業が展開されていることを伺うことができる。

## 4．まとめ

教職課程を履修している学生の教育実習における研究授業で作成した学習指導案についての分析を試みたが、実習生である学生を指導する実習校、教員により学習指導案の形式・内容は異なるものの基本的な事項はすべての指導案で共通している。指導案の形式自体、「単元」「単元の目標」「単元の指導方法」「本時の目標」などにおいては、それぞれの指導案で大きな違いはみられず定型化している。とくに基本的な事項に関する記載については、生徒の実態の記載の有無を除いてはほぼ共通する記載項目となっていた。これは授業に関する基本的な情報であるところから、共通化・一般化となっているものと考える。

学習指導案の指導計画においては、共通する事項は段階等の基礎的な部分（各段階区分、時間他）であり、指導計画の展開の記載方法としては、いくつかにわかれる。「生徒の活動」を中心として記載する指導案もみられるが、「教師の活動」や「学習の内容」を中心としている指導案も多くみられる。従来、教師の教育活動を中心として、学習指導の展開が捉えられていたが、昨今の生徒を主体として展開する授業が進められているところから、生徒の学習活動を授業展開の中心とする指導案の方が次第に増え、今後さらに増加し主流となると考えられる。指導計画の指導上の工夫については、指導案によりかなり異なるものの共通する方法としては、教科用図書の活用、発問・指名、板書であり、これらはいずれの指導案にもみられる基礎的な教育の方法であるといえる。しかし今日の教育方法の方向性を踏まえると、授業展開や生徒に適した多様な教育方法がとられるべきである。とくに主体的・対話的な授業、アクティブな学習が求められているところからでもある。アクティブな工夫としては、現状の指導案においても、ワークシートの利用などの工夫がなされている。導入部分においても、生徒の興味や関心を持たせるような工夫がなされている指導案も多数みられたし、展開の部分においては、グループワークを行うなどアクティブ・ラーニングを用いた授業の展開も計画がされていた。その一方で、従来からの穴埋め式のプリントを用いての授業や板書のみの授業がみられるなど、実習校、指導教員により異なることがあり、授業方法の改革の過渡期であることがわかる。

展開における評価については、記載のないものの方が多いが、細かく評価の観点を記入している指導案もみられた。また個々の生徒に対する評価の多様性による視点により、評価がなされているものもみられ、今後の方向性を見据えた指導案もあった。

授業のまとめについては、学習を定着・深化させるために問題演習、プリントなどを用いて振り返りを行う場合もあるなど、丁寧に取り組む指導案もあれば、口頭の説明のみで済ます場合もあるなど多様である。しかし授業内容の定着は学習上重要であるところから、授業のまとめの部分の重要性も改めて認識されるべきであり、その教育方法上の工夫を深めることが必要不可欠である。

学習指導案の立案・作成については、学生は実習前から授業などで学修をしており、基本的な事項は習得しているもの、授業の展開内容・方法、すなわち教材研究については学修の浅さもあると考える。研究授業の指導案では、授業展開などの工夫はなされているが、教材研究をより深化させ、実際に授業にどれだけ活かしていけるのかが今後の課題になるものと思う。

学習指導の内容・方法については、平成30年に改訂された高等学校学習指導要領では、主体的・対話的に学ぶ授業が求められている。この学習指導要領で育む力とは、「学んだ知識と技能をもとに自分で考え、判断し表現する能力」が重視されている。また、学んだことを社会や人生に生かそうとする「学びに向かう力や人間性」も重要だと位置づけられた。そういった能力を伸ばすため、子供たちが自ら調べたり、子供同士が一緒に話し合いながら学んだりする授業（アクティブ・ラーニング）を行うように求めている[6)]。したがって、今後は学習指導案においても、このことが反映されることが必然的となり、今日がまさに変革期にある。実際に本年度に行われた教育実習の学習指導案は、授業内容・方法に工夫、評価方法に変化がみられた。生徒を学習の主体として捉え、授業展開などが計画され、何ができたかという基準で評価がなされるようになっていた。これからは、このような学習指導案が立案され授業が展開されることになろうが、実習校の指導教員や大学の教職課程を担当する教員は、教育方法や教材研究の新たな展開、とくに生徒主体の授業設計・指導に精通していなかければならないことは言うまでもない。そのための教員の意識の改革が最も重要な点であろう。

学習指導案は、教育実習の授業を行うための中心的な必要不可欠なものである。授業者は、授業のために教材研究を行い、指導方法を十分に練るが、その結果として示されるのが、学習指導案である。実習校や指導教員によりその形式や内容等が異なることは従前より知られていたが、大学においては授業のなかで標準的な学習指導案の作成や教育方法の工夫等についての学修を行っているものの、学校現場においては多様な内容となっていることを、ここで具体的に示すことができた。したがって、この現状を踏まえたうえで、大学においては、学生の教育現場における教育実習の学びに資するような適切な指導の充実が、また最新の知識技術の修得のための学

修の指導が、求められているのではあるまいか。加えて、学習指導案の作成はもとより、授業の展開のあり方、新たな教育方法に関する指導に、工夫を重ねていかなければならないのではないかと思う。

## 引用文献


1）主たる教育実習校である高等学校に焦点をあてた。
2）同意を得たうえで学習指導案の提供を受けた。実習校名、指導教員名、授業実施者名などの個人情報が特定されるような記載上の情報を削除したうえで分析を行った。
3）「高等学校学習指導要領の改訂のポイント」文部科学省
www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/02/19/1384661_002.pdf
4）平成28年5月9日教育課程部会高等学校部会資料8（会議後修正）「主体的・対話的で深い学びの実現（「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善）について（イメージ）（案）」
5）北海道私立大学・短期大学教職課程研究連絡協議会編（2011）「教育実習日誌　第3版」学術図書出版
6）北海道新聞2019年8月6日、『授業内容、大学入試を一新』、「まなびのひろばぐんぐん」


## 参考文献


池田稔、酒井裕、野里房代、森秀善（2011）「教育実習総説　第三版」学文社
政府広報オンライン「2020年度、子供の学びが進化します！新しい学習指導要領、スタート！」https://www.gov-online.go.jp/useful/article/201903/2.html
全国公民科・社会科教育研究会（2003）「高等学校公民科　指導と評価」清水書院
北海道私立大学・短期大学教職課程研究連絡協議会編（2010）「教育実習の手引（第6版）」学術図書出版
文部科学省（2019）「平成30年度文部科学白書」全国官報販売協同組合
文部科学省（2019）「高等学校学習指導要領（平成30年告示）」東山書房
山崎英則（2004）「教育実習完全ガイド」ミネルヴァ書房
山崎英則、北川明、佐藤隆（2003）「教育実習ガイダンス」東信堂

# Study on teaching methods by analyzing teaching plans：Analysis of the plan that students created in an educational training

Jun SHIRAISHI*

In this article we would like to describe issues related to teaching methods by analyzing teaching plans created by students during their teaching practice.

The high school learning guidelines were revised in 2018, aiming for "an improvement of classes for the realization of proactive and interactive deep learning". With this in mind, how do students actually conduct their classes during teaching practice? By analyzing the content of study plans devised by students during their teaching practice, we investigated teaching methods and contents of classes conducted by students and examined instructional issues regarding the teaching methods of learning students aspiring to become teachers.

Previously, many educational methods listed in teaching plans focused on the educational activities of teachers themselves. However, due to a demand for lesson development centered on students instead, the number of methods focusing on the learning activities of students has increased. The teaching methods used in class include the use of textbooks, questions and board writing. However, considering the direction of future educational methods, such as classes characterized by proactive and interactive deep learning, more diverse educational methods are required. As for the analyzed teaching plans, while there were some that adopted methods such as group work in their classes, many relied mainly on traditional printouts with blanks to fill in and blackboard writing, which indicates that we are currently still in a period of transition towards improvement.

As for the methods of creating their teaching plans, students have studied and mastered basics such as different teaching models in university classes prior to their teaching practice, however it can be said that their study and understanding of specific teaching methods and techniques is still somewhat shallow. Therefore, it is necessary to provide appropriate guidance and advice to students in order to enable them to further deepen their research on teaching methods and materials during their courses at university.

Key Words：Teaching methods, Teaching plans, Teaching practice of student

* Department of Social Work Practice, Social Welfare Course